

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)

研究期間：2007～2008

課題番号：19820054

研究課題名(和文) 南インド、アーンドラ地方における宗教美術の様相に関する研究

研究課題名(英文) Study on Aspects of Religious Art at Andradesha, South India

研究代表者

永田 郁(NAGATA KAORU)

崇城大学・芸術学部・准教授

研究者番号：20454952

研究成果の概要：

本研究「南インド・アーンドラ地方における宗教美術の様相に関する研究」において、アーンドラ地方における宗教美術の様相は、アマラーヴァティー大塔やナーガールジュナコンダの仏教遺跡を核に、仏教美術、ヒンドゥー教、その他古来より信仰されていた土着のヤクシャや英雄神への信仰といったものが相互に交流し展開しており、すなわち、インドの宗教美術が民間信仰等の基層の文化を軸として、その融合により仏教、ヒンドゥー教の両美術が大きく発展していくという発展過程が本研究の実地調査および研究によって明らかとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,320,000	0	1,320,000
2008年度	1,350,000	405,000	1,755,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,670,000	405,000	3,075,000

研究分野：インド美術史

科研費の分科・細目：人文学・哲学・美学美術史

キーワード：インド美術史・アーンドラ地方・仏教美術・ヒンドゥー教美術・アマラーヴァティー・ナーガールジュナコンダ・丸彫神像・民間信仰

1. 研究開始当初の背景

これまで一貫して古代インドにおける民間信仰の神々の一つであるヤクシャの造形や信仰の様相を通して、古代インドにおいて宗教美術がどのように発展して、多様な図像や表現形式を確立してきたかについて研究してきた。これまでの研究において、そのヤクシャ信仰をはじめとする土着的な信仰が古代において仏教美術に果たしてきた役割が非常に重要な地位を占めていたことがある程度把握でき、いわばヤクシャ信仰の形態

や造形を取り込んで、仏教美術は多様な表現形式を確立してきたといえる。さらに近年の研究においては、初期仏教およびその美術において如何に民間信仰の力を借りて、教団を発展させ、仏教独自の造形を形成したかについて見直す傾向にある(Decaroli, R., *Haunting the Buddha: Indian Popular Religious and the Formation of Buddhism*, Oxford, 2004. 等)。このことからインドにおいて宗教およびその造形活動である美術の上で《土着化》という問題は極めて重要な問

題であり、基層の文化との融合なくしては、インドの宗教およびその美術の発展は成立しえない。

従来、このような観点はインド美術史研究において幾つか優れた研究はみられるものの、仏教美術は仏教美術として捉える傾向にあり、また仏教美術の起源という視点から仏教のベールだけをとり出して論じる傾向にあった。インド美術史というものがどのような構造のもとで成立しているかについてこれまであまり注目されて来なかったと言える。従来のインド美術史研究の状況を踏まえ、《土着化》をキーワードにインド美術史を捉え直そうとしたのが本研究「南インド・アーンドラ地方における宗教美術の様相に関する研究」である。

2. 研究の目的

本研究が南インド・アーンドラ地方における宗教美術を取り上げるかについてであるが、これまで南インド・アーンドラ地方については仏教美術を中心に内外により盛んに研究がなされ、これまでの研究においてなお研究の余地を残すものの、ある程度研究成果が得られている。しかしながら、同時代の中インドのクシャーン朝マトゥラーの美術を考えた場合、仏教美術が主たる研究対象となっているが、この地は当時において仏教だけではなく、ヒンドゥー教、ジャイナ教といった宗教美術が盛んに造形活動を行い、インドの造形美術の一大センターであったことが知られ、当時において様々な信仰のもと、造形美術が制作されていたことが推察される。ただ、マトゥラーの宗教美術が如何なる祠堂や寺院で祀られ、信仰されていたかについては遺跡の発掘がほとんど進んでないために、出土品の様式的、図像学的な研究においてはある程度の成果が得られているが、当地の宗教美術の実情を解明するには遺跡の情報がほとんどないために、構造的に復元することは困難な状況にあると言える。

その反面、本研究で取り上げる南インド、アーンドラ地方においてはアマラーヴァティー大塔、ナーガールジュナコンダといった仏教を中心とした遺跡の他に、その当時信仰されていたヒンドゥー教美術の遺跡についても発掘調査され、古代インドにおける信仰やそれに伴う造形活動の様相についてその当時の実情をある程度復元可能な地域であると言える。特に当地の造形活動はマウリヤ朝のアショーカ王の創建とされるアマラーヴァティー大塔をはじめ、2世紀以降デカン地方を経由して南下し、アマラーヴァティーを拠点としたサータヴァーハナ朝、その後3-4世紀にナーガールジュナコンダを拠点に置いたイクシュヴァーク朝、その後南インドで勢力をもつパッラヴァ朝の時代(7-8

世紀頃)までの造形作品と遺跡が確認でき、そこには仏教美術、密教美術、ヒンドゥー教美術が含まれ、インドの宗教美術の様相を考えるうえでも、重要な地域と言える。インド美術史において紀元後3-4世紀頃のヒンドゥー教美術の展開の様相については未だ不明な部分が多いが、南インド・アーンドラ地方においては、3-4世紀頃の遺構がナーガールジュナコンダ、アーンドラ・ブラデーシュ州内部に現存しているため、当地で仏教信仰の他に、如何なる信仰の痕跡があったかについてある程度把握できる状況にある。このように3-4世紀頃のヒンドゥー教美術の遺品や遺構が現存する南インド・アーンドラ地方の宗教美術を調査・研究することによって、インド美術において仏教美術とヒンドゥー教美術が如何に交流し、影響しあって共存していたかという古代インドにおける宗教美術の実情を解明することが本研究の目的である。

以上の研究を通して、インドの宗教美術のあり方、特に仏教美術とヒンドゥー教美術との関係を建築・美術の双方から探ることにより、これまで個別に扱われてきた各宗教美術が、その関係性を明らかにすることにより、如何なる造形背景のもとで、建築・美術が人々や王朝の信仰心に応える形で、造形化されてきたか、明らかとなり、仏教、ヒンドゥー教美術双方からの宗教美術のアプローチは基層文化に如何に新たな信仰が融合し、土着化によって造形を発展してきたインド美術の構造を読み解く一つの鍵となる。

3. 研究の方法

本研究はこれまで個別的に研究されてきた仏教美術、ヒンドゥー教美術について、インドの宗教美術のあり方に則した方法で研究を進めた。特に本研究で対象とする南インド、アーンドラ地方の宗教美術については、前代の古代初期パールフト、サーンチーの寄進活動と比べ、相違点が看取される。つまり古代初期においてはその寄進活動は経済的に恵まれた富裕層が中心に個人で仏塔や欄楯などの建築部材を寄進する小口寄進が中心であったが、しかし南インド、アーンドラ地方においては造形活動が活発となる後2-4世紀頃に、その寄進行為に変容がみられ、従来の個人による寄進行為に加え、特にイクシュヴァーク朝ナーガールジュナコンダにおいては王家の女性たちが中心となり、仏塔に設けられたアーヤカ柱を王家直系の女性が寄進する形態が認められる。このことは何を意味するかというと、インドの王朝の為政者(男性)は伝統的にバラモン教の祭式を執り行い、一方女性たちは仏教に篤く信仰心を抱き、仏教の造形活動に寄進を行っていた。そして続いて、5世紀以降、西デカン

地方で後期の石窟寺院においては王朝が石窟自体を寄進する形態が登場する。為政者たちは、バラモン・ヒンドゥー教徒でありながら、功德のために仏教の石窟寺院を寄進することとなる。

この点に注目すると、これまで仏教、ヒンドゥー教の各美術を個別に扱って研究する方法はどこかで不都合が生じてくるのである。ただ、古代初期においては造形活動が王朝を主体としていなかったため、問題とはならないが、後2～3世紀以降になると、王朝が主体となる寄進活動も活発化し、同時にこの時代になるとヒンドゥー教美術の造形活動も徐々に表面化することとなり、インドの宗教美術を包括的に研究するには上記の研究目的で記したように仏教、ヒンドゥー教美術の両者が確認できる時代や地域においては一方的な視点からよりは相互の造形や建築を研究の俎上に挙げ、論じることがより具体的な宗教美術の様相の理解に繋がる。そこで本研究は以下の観点から調査・研究を進めた。

(1) 南インド・アーンドラ地方に現存する仏教・ヒンドゥー教の建築的遺構の現地調査と造形作品の第一次資料の収集。その中でナーガールジュナコンダなど遺構が現在確認できないものに対してはインド考古局が発掘調査した報告書 (*Indian archaeology: A Review, Annual Report, Archaeological Survey of India*) や I. K. シェルマ博士の *The Development of Early Saiva Art and Architecture*, 1982. の図面、記述を援用した。現地の調査についてはインド考古局 (中央政府)、アーンドラ・プラデーシュ州政府の考古局など関係機関に協力を要請して、写真撮影の許可などを得て、実施した。

(2) 上記で収集した第一資料について、建築・美術の双方、特に建築については美術作品の建築モチーフも対象とし、その建築様式や表現形式、図像を取り上げ、如何なる宗教に属するか整理・分類し、両者を比較分析することにより、それぞれの影響関係を見極めた。また5世紀以降の中インド (グプタ朝後期・ヴァーカータカ朝)、南インド (特にタミル地方、パッラヴァ朝) のヒンドゥー教美術の作品資料とも比較検討を通して、アーンドラ地方の美術の伝播ルートを突き止めることにより、古代インド美術におけるアーンドラ地方の位置付けが明確となる。

(3) 仏教、ヒンドゥー教の共存が確認できるアーンドラ地方の信仰の実態を解明するためには、第一資料の他に、銘文資料もその実情を知る有力な手掛かりとなる。本研究では特にナーガールジュナコンダの仏教碑銘について、イクシュヴァーク朝の王家に関連する仏教碑銘を精査することにより、当時の信仰の様相を具体的に探っていった。

4. 研究成果

2007年度は、南インド・アーンドラ地方の中で、ナーガールジュナコンダ、アマラーヴァティーの両遺跡および初期ヒンドゥー教の馬蹄形寺院の遺例が残るチェジェルラのカポテーシュヴァラ寺院の遺跡調査、仏教美術・ヒンドゥー教美術の遺品が収蔵されるナーガールジュナコンダ、アマラーヴァティーの考古博物館、ハイデラバード州立博物館、グントウールのパウダシュリー考古博物館等の調査を行った。

南インド・アーンドラ地方において釈迦の生涯を画像化した仏伝図のうち、釈迦誕生の前後の場面、いわゆる《誕生サイクル》の場面 (「託胎霊夢」「誕生」「夢占い」「ヤクシャ廟参詣」など) に民間信仰の神々ヤクシャや四天王が頻繁に登場する。これらは古来より信仰されていた部族神ヤクシャの伝統を色濃く残し、これらの神々が釈迦族の世嗣の誕生を祝福し、また守護の目的で《誕生サイクル》の仏伝図中に登場している。またこのような部族を守護するヤクシャをはじめ、当時の民間信仰の様相を、アーンドラ地方のイクシュヴァーク朝のナーガールジュナコンダに現存する遺構や遺品は伝えている。

例えば、ナーガールジュナコンダの大塔のアーヤカ柱の銘文にみられる初代チャーナムーラ王の賛辞には「ヴィルーパークシャの主、マハーセーナ神に守護された、大王」とあり、「ヴィルーパークシャ」なる語は、『マハーバーラタ』、『カターサリットサーガラ』においてヤクシャと関連し、王朝と民間信仰ヤクシャの関係を示唆している。この他、ナーガールジュナコンダでは、仏教美術の遺品の他にカールティケーヤの丸彫像、ヤクシャの丸彫像断片などインド考古局の当地の発掘調査で跡付けられた祠堂の本尊 (遺跡 82、遺跡 64 等) が確認でき、イクシュヴァーク朝ナーガールジュナコンダでは仏教、ヒンドゥー教とともに、また上記の民間信仰の神々が信仰されていたことが跡付けられ、当時の重層的な信仰の様相が明らかとなった。特にカールティケーヤ像については5世紀以降にシヴァの息子に組み込まれる以前の民間信仰の様相を色濃く残しており、またヤクシャ神像の断片などの存在から当地で民間信仰が盛んな様相が看取された。このことはクシャーン朝マトゥラーにおいても同様の出土品が確認される点、当地においては本尊共に遺構も確認されており、当時の宗教美術の様相を解明する手掛かりとなるであろう (5. 主な発表論文等、図書①参照)。

また、チェジェルラのカポテーシュヴァラ寺院については、本来仏教寺院で、後にヒンドゥー教に転化したとみられるが、ナーガールジュナコンダにおいても仏教以外に馬蹄形寺院の遺例が看取され、検討の余地がある

う。インド全体を考えた場合、馬蹄形の寺院の構造は西デカン地方の紀元前の前期石窟寺院や紀元後のクシャー朝マトゥラー（ソク）のナーガ祠堂等にも確認される点、馬蹄形の祠堂が仏教起源とする見解についてもインドの宗教美術の様相を鑑み、馬蹄形寺院の展開を見据えた上で、考慮する必要があることを実地調査で認識した点、今後の研究の視座を提供してくれた。

2008年度は、まず南インド・アーンドラ地方に隣接するマハーラーシュトラ州ナグプール近郊にあるマンサール遺跡出土のいわゆる「マンサール・シヴァ」について、2008年6月30日～7月1日両日英国・大英博物館にて開催されたシンポジウム“Recent Vakataka and Gupta Discoveries”において研究発表を行った（5. 主な発表論文等、学会発表①参照）。本研究は初期（5世紀前半）のヒンドゥー教美術の様相について、アーンドラ地方の宗教美術との比較検討のため行ったが、このマンサールは東ヴァーカータカ朝の遺跡であり、王朝はヒンドゥー教を信仰しており、マンサール遺跡は当王朝における重要な拠点となった遺跡である。本像はこれまで「マンサール・シヴァ」と称され、シヴァの一形態と考えられていた。しかしながら、本像を詳細に調査・分析した結果、この像はシヴァの図像的な特徴を有したシヴァの眷属「ガナ」であるとの結論に至った。また、本像が身につけている装身具やシヴァの眷属に、シヴァの特徴である三日月や髑髏といった要素を付加して、シヴァの眷属とする表現方法は、本家東ヴァーカータカ朝の分家である西ヴァーカータカ朝が寄進したとみられるアジャンター第19窟の守門ヤクシャ像に同様の表現がみられ、東ヴァーカータカ朝のヒンドゥー教美術の表現アイテムが分家である西ヴァーカータカ朝の造営した仏教石窟に採用されている。王朝を主体とした造形活動においては為政者の信仰したヒンドゥー教と仏教の交流が看取される点は、インドの宗教美術を考える上で、非常に示唆に富んでおり、南インド、アーンドラ地方の宗教美術の実情を考える上で非常に有益な手だてとなった。

次に2009年2月16日～2月28日にアーンドラ、タミル地方の仏教遺跡、初期ヒンドゥー教美術、アーンドラ、タミル地方が隣接する地域の馬蹄形寺院（5世紀以降）、ヒンドゥー教石窟寺院（マヘンドラ時代：7世紀前半）の現地調査を実施した。

今回の実地調査において以下の点が明らかとなった。まず、アーンドラ・プラデーシュ州においては近年発掘されたパニギリ遺跡の調査において、当遺跡は仏教遺跡ではあるが、出土品の中には丸彫神像が確認でき、特にこの神像は前年度調査したアマラーヴ

ァティー考古博物館、また今回調査したアマラーヴァティーの州立博物館においても確認できたものである。その容姿はナーガールジュナコンダ等出土の蓮華手ヤクシャ、グントゥール、バウダシュリー考古博物館蔵、コンダモトゥル出土の英雄神といった仏教以外の尊像の姿と酷似している。このことからアーンドラ地方において仏像やヒンドゥー教の神像以外にも民間信仰による神像が多く制作されていたことが確認できた。

特に仏教、ヒンドゥー教に直接属さない神像の存在について、昨年度調査したナーガールジュナコンダにおいては、仏教遺跡、ヒンドゥー教の遺跡の他に、ヤクシャやハーリーティーといった民間信仰の神を祀る祠堂や本尊の存在が明らかとなった。また、今回の調査においても、仏教遺跡において、丸彫神像の遺例が確認できた。そして、これらの像が、仏教遺跡内部ではストゥーパの基壇部に嵌め込まれた石板に表された〈ストゥーパ図〉等に確認でき、また丸彫像として遺跡から出土している。特にこれら〈ストゥーパ図〉の仏塔の開口部に表されたモチーフを分類すると、仏陀像、仏伝図、転輪聖王像、蓮華手ヤクシャ像に大別でき、仏伝図を除き、これらの像は仏陀像と同様正面観で表される点、礼拝像的な性格を持っている。このことは南インド、アーンドラ地方において仏像に脇侍を従える三尊像の遺例が確認できないことと関連していることが明らかとなった。

同時代のクシャー朝ガンダーラにおいては仏陀像の脇侍に躊躇なく、菩薩像を採用し、仏三尊像とし、同王朝のマトゥラーにおいてはヤクシャを脇侍とし、仏三尊像を形成していた。それに対し、南インド・アーンドラ地方においてはクシャー朝ガンダーラ、マトゥラーでみられた仏三尊像が管見に及ぶ限り一例も確認できないのである。こうした状況には恐らく上記でみた丸彫神像や〈ストゥーパ図〉に表されたヤクシャ像などが信仰の対象となっていたため、H. ダヤルが主張するように菩薩こそ一般民衆が祈願するものを叶えてくれる存在としてバクティー信仰の対象となり、超個人的な仏陀よりも人間的な存在として親しみをもたれたからに相違ないと言えるのである。実際、丸彫神像の作例は、コンダモトゥル出土の「ナラシンハと5人のヴィーラ（英雄神）」（グントゥール、バウダシュリー考古博物館所蔵）と同様の姿をとっていることからそのことは推察され、仏陀だけが唯一の信仰対象ではなく、当地の人々が古来より信仰していた身近な神々とともに、仏陀も信仰されていたから、仏教遺跡内部に仏教以外の尊像が含まれている様相は、南インド・アーンドラ地方の信仰の様相を如実に物語っているのである。そうした宗教美術の様相を表す一例としてイ

クシュヴァーク朝ナーガールジュナコンダが挙げられ、またアーンドラ地方の仏教美術の拠点であったアマラーヴァティーにおいても同様の痕跡が窺われた(5. 主な発表論文等、雑誌論文①参照)。

また、ハイデラバード州政府考古局所蔵のケーサラグッタ出土の壺(Garbhapatra)には、ヒンドゥー教寺院建築の儀軌に登場するヴァストゥプルシャと5体の神像が表され、4-5世紀のこの地のヒンドゥー教寺院建立の様相を物語る重要な資料であり、実際ケーサラグッタのラーマリンゲーシュヴァラ寺院には、露天に5世紀頃のリングが多く安置され、当時のヒンドゥー教の祠堂や寺院の様相を知る上で、ケーサラグッタの上記の出土品・遺跡は極めて重要であり、これらの資料は4世紀以降のイクシュヴァーク朝以降のアーンドラ地方の宗教美術の展開を解明するための重要な手掛かりを提供してくれる。

昨年度同様、馬蹄形寺院の調査も継続して実施した。今回は、ナーガールジュナコンダ以南からタミル地方に近いアーンドラ・プラデーシュ州南部にあるラーマティルタムのラーマリンゲーシュヴァラ寺院、グディマランのパラシュラメーシュヴァラ寺院を調査した。この他、馬蹄形寺院はタミル・ナードゥ州北部のティルッタニ、アーンドラ・プラデーシュ州北のマハーラーシュトラ州のテールにも確認できる。このようにアーンドラ・プラデーシュ州を中心とした地域に馬蹄形寺院の遺構が南北に点在していることは、デッカン地方に展開した4乃至5世紀以降に展開したヒンドゥー教美術を考える上で非常に有益な手掛かりであると言える。本研究ではその点十分な調査ができなかったが、馬蹄形寺院を軸にその痕跡を辿ることにより、本研究が目指した仏教・ヒンドゥー教両美術の交流が具体的に追えるのではないかと、という道筋を今回の調査で得られたことは非常に有益であった。

本研究は《土着化》をキーワードに南インド・アーンドラ地方の宗教美術の様相について調査・研究を行った。従来、仏教、ヒンドゥー教美術を個別的に研究されていたことで見過ごされてきたものが幾つか浮き彫りとなり、特にナーガールジュナコンダの遺構を包括的に調査・研究することによって、インドの宗教美術のあり方について、新たな視点・方法論の試みに取り組んだ。

5世紀以降、ヒンドゥー教美術が隆盛する背景には、仏教・ヒンドゥー教双方の交流に拠るところが大きく、また寄進形態の変容、つまり小口寄進から大規模寄進への移行により造営された宗教建造物およびそれに付随する造形は王朝の信仰が色濃く反映していることが明らかとなった。今後、上記で試した観点・方法論をさらに発展させ、インド

の宗教美術の包括的な研究を進めていき、民間信仰という身近な信仰が、主体となる宗教に与える影響、つまりインド美術やインドの信仰にある《土着化》という問題を通して、インド美術の構造を読み解いていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 永田 郁「南インド・アーンドラ地方の宗教美術の様相について-「なぜ菩薩像が造像されなかったか」を巡って-」『崇城大学芸術学部研究紀要』第2号(2008)、pp. 69-90, 2009年、査読無。
- ② Kaoru NAGATA, The Problems in the Identifications of Gana-like Images from Mansar: Is it Śiva or Gana?, Bakker, H. T. (ed.) Mansar: The Discovery of Pravareshvara and Pravara-pura Temple and Residence of the Vakataka King Pravarasena II, Proceedings of a symposium at the British Museum (E-Book), pp. 204-233, 2008, 査読無。
- ③ 永田 郁「南インド・アーンドラ地方の「降魔成道」図について-魔衆図像を中心に-」『交流と伝統の視点から見た仏教美術の研究』(平成16-19年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書) pp. 41-66, 2008年、査読無。
- ④ 永田 郁「シヴァ・ガナ像に関する試論-古代後期におけるシヴァの眷属図像の形成と機能をめぐって-」『崇城大学芸術学部研究紀要』第1号、pp. 19-43, 2008年、査読有。
- ⑤ 永田 郁「西デッカン地方の後期仏教石窟における仏殿本尊脇侍像・守門像について」『美学美術史研究論集』第22号、pp. 35-53. 2007年、査読有。

[学会発表] (計 2 件)

- ① Kaoru NAGATA, "The Problems in the Identifications of Gana-like Images from Mansar: Śiva or Gana." Recent Vakataka and Gupta Discoveries, A Symposium at the British Museum, London, 30 June-01 July, 2008. 2008年6月30日、イギリス・大英博物館。
- ② 永田 郁「アジャンター後期窟における仏殿本尊脇侍像の形成について」第77回九州芸術学会、2007年11月24日、沖縄県立芸術大学。

[図書] (計 1 件)

- ① 宮治 昭、平岡 三保子、森 雅秀、永田 郁他(共著)中央公論美術出版社、『汎アジアの仏教美術』(宮治昭教授献呈論文集

編集員会編) 2007 年、総頁数 492 頁 (その内 pp. 78-100. 員数 19 人、3 番目)

[その他]

ホームページ等

① 雑誌論文②、学会発表①に関するシンポジウムのホームページ

Recent Vakataka and Gupta Discoveries, A Symposium at the British Museum, London , 30 June-01 July, 2008. & its proceedings

URL: <http://mansar.eldoc.ub.rug.nl/>

<http://mansar.eldoc.ub.rug.nl/root4/>

②永田 郁「ガンダーラ美術とインド世界」『ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡』展・仏教入門講座 (福岡アジア美術館、2008 年 4 月 12 日) (講演)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永田 郁 (NAGATA KAORU)

崇城大学・芸術学部・准教授

研究者番号：20454952

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし